[阪大ニューズレター]
社会と大学を結ぶ季刊情報誌

Handai NEWS Letter

SEASONAL MAGAZINE

Published by OSAKA UNIVERSITY

No.40
2008/Summer

発行日：平成20年6月1日
発　行：大阪大学
大阪府吹田市山田丘1-1
06-6877-5111
ホームページ：
http://www.osaka-u.ac.jp

◉総長カフェ　21世紀懐徳堂ライブ ―― 工藤恭孝／鷲田清一 ―― 1
不意打ちを食らうように「本」と出合う
インターネット時代の本と書店

◉特集 ―― 武田佐知子／湯浅邦弘 ―― 5
「懐徳堂」の学問伝統を21世紀へ
「21世紀懐徳堂」は「大阪ルネサンス」を目指す

◉産学連携 ―― 北岡康夫／森　勇介 ―― 7
技術シーズの実用化・事業化加速を支援する
「共同研究はスピードが命だ」

OB訪問
辻本　賢・学校法人金蘭千里学園理事長 ― 9

元気です！在学生
松浦由加子・人間科学部3年生 ― 10

健康
発達障害を持つ子どもの現状とこれからの課題 ― 永井利三郎 ― 11

心理
マスコミのスケープゴーティング ― 釘原直樹 ― 12

研究室紹介
安全のための量子センシング ― 糸﨑秀夫 ― 13

阪大ニュース
RISSが洞爺湖サミットなど記念しシンポジウム開催 ほか ― 14
大阪大学21世紀懐徳堂 オープニングセレモニー開催 ほか ― 15

総長カフェ
21世紀懐徳堂ライブ

インターネット時代の本と書店

●株式会社ジュンク堂書店代表取締役社長 ― 工藤恭孝 ― Yasutaka Kudo
●大阪大学総長 ― 鷲田清一 ― Kiyokazu Washida

「本」と出合う 不意打ちを食らうように

三十数年前、神戸三宮に生まれた一軒の本屋が、
バブル崩壊も大震災も乗り越えて成長した。
インターネット時代のさなかに、
世界最大級の書店を東京池袋に出店した「ジュンク堂書店」。
椅子とテーブルを置いた座り読みコーナー、
数百万冊の蔵書、カリスマ店員とのやりとり――。
社長の工藤恭孝さんと鷲田総長が語り合う
「リアルな本と過ごす豊かな時間」。

世間は「活字離れ」と言うけれど

鷲田　街の書店がどんどん減っていく中で、ジュンク堂書店は躍進を続けています。店舗数が増え、売り場面積が広大で、池袋本店は２０００坪で日本一。私がジュンク堂さんに足しげく通うようになったのは、ほしい本が必ず見つかるからです。

今、活字離れが進んでいると世間では騒がれていますが、実際はどうなんですか。

工藤　そんなことはないと思いますよ。ここ30年ぐらいのデータしかないので断言はできませんが、50年前と比べると、出版点数も売れている冊数も、今のほうが断然多いと思います。ピークは13年ほど前で、その後3割程度減り、現在はおそらく20年ほど前の数字になっていると思います。この13年間はCD、携帯電話、ネットと対抗馬が出てきて、本の売り上げは下がり続けています。もともと1カ月に10冊も20冊も読むような本好きは人口の2％ぐらいで、1カ月に数冊ほど読む人を合わせても、せいぜい1割から2割。これは昔から変わらない読書好きの人口比率です。ジュンク堂はこういった数パーセントのコアなお客様が中心ですから、出版不況でも売り上げが伸びているのだと思います。

鷲田　一人あたりの買う本が多いということですか。

工藤　本好きは、本を買うお金を惜しみませんからね。池袋店ではカゴいっぱい買う人が、どの時間帯にもどなたかはいらっしゃいます。うちのお客様を見ている限り、活字離れは感じませんが、1日24時間は変わらないので、紙の活字とネットの活字で時間のシェア争いになっているのは確かです。

鷲田　ベストセラーを置く店とマニュアル本や参考書などを置く店の二極化が進み、街の本屋さんが面白くなくなった気がします。ジュンク堂では専門書が体系立てて置かれ、何年も前に出た本もちゃんとあって、うれしくなります。

不意打ちを食らいに、本屋へ行こう

鷲田　昔は本のタイトルを忘れても、書店でちょっとキーワードを言えば、その本がある棚まで連れて行ってくれる職人芸を持つ店員さんがいましたね。今は多くの本屋さんが、コンピューターにキーワードを入れて調べる。あれなら僕にもできそうだ(笑)。

工藤　うちは、まさに鷲田先生のような熟達した本好きのお客様に鍛えられてきました。学閥や学派、あるいは犬猿の仲で、このお二人の本はタイトルが似ていても横に並べてはいけないとか、この本を欠かすとは何事かとおしかりを受けたり……。

鷲田　奥が深いですね。それでジュンク堂さんの本棚は、見ていて気持ちいいわけだ。

工藤　本の並べ方の基本は、本が探しやすいことが一番ですが、お客様が、うちの棚のファンになってくださるように、「この店は分かってくれている」と思っていただけるように努力しています。

鷲田　以前、人はどうして美術館へ行くのかという議論をしたことがあるんです。そこで得た結論は、「ずっと見たかったのを、やっと見ることができる」というタイプが一番多いだろう。二番目に「画家の名前も知らないが、見たこともないものを見たい」というタイプ。最後に「この画家に関心はないが、一応見ておかないといけないから見る」というタイプ。本屋さんにも同じことが言えるのではないでしょうか。新聞で話題になっているから読んでおかなければという人もいるでしょう。

僕はどちらかというと二番目で、不意打ちを食らうような、「えっ、こんな本があるの！」という、新たな本との出合いを驚き楽しむタイプ。若いころは三番目で、岩波新書なんか、友だちの前で読んでいないとは恥ずかしくて言えず、読んだふりをしていたこともありましたが(笑)。

本とコンピューターは、農耕文化と狩猟文化？

鷲田　大学だったら「いい学生を入れる」「いい授業をする」、この相乗効果で大学のレベルアップを図ります。書

僕はコンピューターが本の文化をだめにしているとも思わないし、本が時代遅れとも思いません。（鷲田）

店のレベルアップについては、どのようにお考えですか。

工藤　大学と同様、相乗効果ですね。いいお客様に来てもらわないと社員もやる気がなくなるし、いい社員を入れないと、お客様のニーズに応えられません。カリスマ店員といわれるような優秀な社員がおり、鋭い感性をお持ちのお客様が通ってくださってこそ、書店のブランド力が上がっていくのだと思います。

鷲田　昔から職人芸は盗むものと言いますが、社員教育はどのようになさっているのですか。

工藤　基本は教えますが、あとは師弟関係で伝授するという形ですね。ジャンルごとに教授クラスの社員、准教授クラスの社員がおり、盗んで学ぶところと、ちゃんと教える部分と両方あります。例えば専門書の並べ方では、巻末の参考文献を見るなど、細かく教えます。徒弟制度のギルドみたいな組織になっています。

鷲田　僕はコンピューターが本の文化をだめにしているとも思わないし、本が時代遅れとも思いません。たとえて言うと、本とコンピューターは、それぞれ農耕文化と狩猟文化。本の世界は起承転結があり、時間軸に沿って、ものごとが前から順番に進む。これは農耕文化と同じです。一方、コンピューターは時系列で論理を追っていくのではなく、面白いものが来たらパッとつかまえる。狩猟のような感覚があると思うのです。

工藤　同感ですね。本の文化は、雨が降るのを待ったり、実が熟すのを待ったり、その時間を楽しんでいるというか……。

鷲田　そうです。一方、コンピューターやネットの世界は、本の世界とは神経の働かせ方が違う気がします。僕なんか、いまだに本派ですから、本のほうがディープな世界だと思っています。

リアルな本を五感で味読する

工藤　本もネットも基本的にはコンテンツですから、紙に印刷しているかどうかの差で、中身を買ってもらっていることに違いはないと思います。結局、本とコンピューターの違いは、情報量の差ですね。本のほうが情報量は少ないですが、その分、深くなっていくのではないでしょうか。反対に検索となると、うちのカリスマ店員でも、自分のジャンル以外はネット検索に太刀打ちできません。でも検索性、利便性はネットが上ですが、「不意打ちの出合い」や「この本棚の並べ方が好き」といった感動は、リアルな本があってこそでしょう。

鷲田　本は字だけ見ているんじゃない。表紙カバー、紙の手触り、ページをめくるときの音……。本を読むという行為は、五感を総動員して、全体から感じ取って読んでいるのです。

工藤　ネットは画面にデータを流し込んでいるだけで、そういう意味では、本にはまだまだ追いついていないですね。

鷲田　コンピューターがもっと進化して、気配とか感触が表現できるようになったら、ディープなネット体験があ

●鷲田清一（わしだ　きよかず）
1949年、京都府生まれ。大阪大学文学部教授、文学研究科長、理事・副学長を経て、2007年8月26日に大阪大学総長就任。専門は臨床哲学、倫理学。

**本もネットも基本的にはコンテンツですから、
紙に印刷しているかどうかの差で、
中身を買ってもらっていることに違いはないと思います。**（工藤）

るのかもしれません。僕はコンピューターのワープロ機能しか使っていないけれど、コンピューターやネットに習熟した人が画面を見て、浅いなあとか、深いなあと言っているのを聞いたことがあります。僕は本なら、1ページ開いただけで、その本が深いか浅いか分かりますが、ネットでも、そういう感覚があるんですね。

工藤　深さもあるかもしれませんが、ネットの特性は利便性ですね。うちではコンピューターのシステムで、本の出入りが全部チェックできます。お客様の本の嗜好まで判断して、お勧めすることも可能です。ちょっとおせっかいかなと思い、うちでは実施していませんが、アマゾンなどのネット書店ではやっていますね。

「立ち読み禁止、座り読み歓迎」の心が通い合う本屋

鷲田　僕は30年前、大阪で勤めを始めましたが、地下鉄御堂筋線に乗ってびっくりしたのは、電車の中で本を読んでいる人が、京都より、神戸より、東京より多かったこと。さらに驚いたのは、読んでいる本の多くが図書館で借りた本だったこと。これは、なかなかのカルチャーだと思いました。新聞の書評を読むとすぐに図書館に要望カードを出して、買ってもらうということも聞きました。

工藤　図書館では、そうやって要望が出てきた本がそろっていくわけですから、「不意打ちを食らう」本との出合いは少ないでしょう。そこに、本屋の使命があるように思います。本には、著者の貴重な知識や人生が凝縮されています。われわれは非常に大切なものを扱っているわけです。そんな本を読者とも一緒に大事にしてもらえる空間をつくるのが、われわれの仕事。赤字になろうが、一県に一店はちゃんとした本屋を残したい。ゆったりした気分で本に触れて、疲れたらぼーっとできる、本のそばで黙想もできる、そういう本屋が目標です。

鷲田　「立ち読み禁止、座り読み歓迎」というキャッチコピーは、世間を驚かせました。椅子とテーブルを置いて、座り読みコーナーまでつくって、本屋の新しいスタイルを打ち出された。ちょっと息抜きできるすき間があるから、不意打ちの出合いのスキもある。

工藤　そのとおりです。私は、自分の本棚のような思い入れを持ってもらえるような本屋にしたいんです。棚の担当者も自分の本棚と思って心を込めて並べています。そういう、お客様と心が通い合う本屋として、地域に根づいていきたいですね。

　そういえば大阪大学も、昔のように都会に出てこられたらいかがですか。図書館も近いし、うちの本屋も近いですし……。

鷲田　そうそう、新地も近いしね（笑）。学生たちにはできるだけ多くの出会いを体験してほしいと思っています。その中に、きっとジュンク堂さんでの読書体験もあるはずです。これからも、わくわくして通える本屋さんを世界中につくってください。今日はありがとうございました。

●工藤恭孝（くどう　やすたか）
1950年兵庫県生まれ。72年立命館大学法学部卒業、父親が経営するキクヤ図書販売㈱に入社。76年に独立し、㈱ジュンク堂書店代表取締役就任、神戸市三宮にジュンク堂書店1号店を開く。全国に大型書店を展開し、国内33店舗、海外1店舗（パリ）。

◉特集

「懐徳堂」の学問伝統を21世紀へ

「21世紀懐徳堂」は「大阪ルネサンス」を目指す

◉対談
●大阪大学理事・副学長――武田佐知子――Sachiko Takeda　E-mail : YQW01365@nifty.ne.jp
●大阪大学大学院文学研究科教授（中国哲学研究室）――湯浅邦弘――Kunihiro Yuasa　E-mail : yuasa@let.osaka-u.ac.jp

左：湯浅邦弘教授、右：武田佐知子理事・副学長

近世の商都・大坂は、国際学芸都市だった。
その中心に大阪大学の精神的源流とされる「懐徳堂」があった。
町人と武士が机を並べて学び、譲り合いの精神で席次を決めていたという。
富永仲基、山片蟠桃など、
時代に先駆けた知の領域を開いた町人学者も生み出した。
創設から3世紀近い時を経て、今春、豊中キャンパスに「21世紀懐徳堂」が誕生。
社学連携事業の中核を担い、
国際学芸都市復興による
『大阪ルネサンス』を目指している。

大阪大学創立70周年記念事業で作成したCGの懐徳堂式台

◆自己修養から社会貢献へ

武田　今日は、湯浅先生に懐徳堂の何たるかをお聞きしながら、大阪大学21世紀懐徳堂の役割や社学連携の在り方を考えていきたいと思います。

湯浅　懐徳堂は享保9（1724）年、大坂の5人の有力町人の出資によって創設された学校です。学校といえば江戸の昌平黌（しょうへいこう）と各藩の藩校くらいしかなかった時代ですから、非常に画期的なことでした。2年後に江戸幕府から公認されて大坂学問所となりましたが、5町人中心の運営が続きました。

学校の理念は、論語の「君子は徳を懐（おも）う」に由来する校名に端的に表れています。私たちはつい自分のことを棚に上げて人のことをあれこれ言ったり、内面よりも外見に気を取られがちですけれども、まずは目に見えない自らの内側を完成させることに重きを置こうという考え方です。内から外へという方向性を持ちながら内と外を両立させる、自分自身を修養して、今度はそれをもって社会に貢献していくのが懐徳堂の理念です。

武田　それこそ、まさに大阪大学が目指している社学連携ですね。大阪大学は旧帝国大学の中で唯一、市民がつくった私塾を源流としています。また、本学と一つになった旧大阪外国語大学も、一実業家夫人の寄付によって誕生しました。期せずして両校とも、学びの場を求める市民の熱い思いでもって成り立っている学校です。

湯浅　懐徳堂は幕末維新の動乱とともに明治2（1869）年に、百四十余年の歴史をいったん閉じました。その後大正5（1916）年に重建懐徳堂が建設され、昭和20年に戦災で焼けるまで大阪の市民大学としての役割を果たしてきました。戦後は財団法人懐徳堂記念会と大阪大学が協力して、各種講座を開いて今日に至っています。

武田　幸いにもコンクリートの書庫にあって焼失を免れた蔵書が、阪大図書館に残されています。私はあの膨大な蔵書を見て驚き、圧倒されました。調度品などを置いた様子もコンピューターグラフィックで復元され、リアルに体感できますね。

湯浅　残されていた平面図を三次元化し、さまざまな器物も含めて歴史的に考証し、懐徳堂文庫に残っている資料を張り付けて当時の空間を再現しています。

懐徳堂幅

◆古代から大阪は国際学芸都市

湯浅　懐徳堂では商業活動の基盤として「義」を重んじました。当時は士農工商という身分制で商人の位置は低かったのですが、正義に基づく利益追求は正しいことであり、きちんと道徳を身につけて商売を営む者には後から利益がついてくると励ましたのです。これは現代の人々が抱く大阪のイメージとは少し違いますね。

武田　「もうかりまっか」とか、吉本とたこ焼きがあまりにも全国ブランドになってしまっています。そうじゃない大阪を発信していかなければなりません。私たちは21世紀懐徳堂と銘打って、「21世紀にもし江戸時代の懐徳堂が存続していたらどういうことをやっていただろうか」を考えつつ走り出したところなのです。

湯浅　21世紀懐徳堂は今後いろんな事業をされるでしょうが、大阪イメージの再生というか、江戸時代あるいは大正、昭和の初期まであった文化都市、学術都市のイメージをもう一度きちんとアピールしていってほしいと思います。

武田　そのとおりです。大阪は古代から国際都市であり、海外に開かれた最先進地帯でした。渡来文化が最初に入ってくる所であり、難波（なにわ）の港から遣唐使たちが船出していきました。

　つい最近、紫香楽宮跡から発見された8世紀中ごろの木簡に、「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」という歌の一部が記されていたことが大きく報道されました。これは論語や千字文を伝え、日本の学問の発達を可能にした百済の王仁が、梅の花が満開の難波の港をたたえた歌とされています。誰もが梅の花の咲き誇る国際都市・難波を思い浮かべながら、この歌で手習いをしたのです。

　近世には、井原西鶴の文芸や近松門左衛門の人形浄瑠璃が花開きました。そして懐徳堂、適塾。大阪は文化のルーツであり、拠点だったわけです。21世紀懐徳堂の究極の目標は、国際学芸都市大阪を復興させる「大阪ルネサンス」です。

◆社学連携の新拠点が発進

武田　大阪大学の広範な最先端の学問を、市民の皆さんにも積極的に提供したい。今まで大阪大学中之島講座をはじめ、各学部でも市民講座を開催してきましたが、どこで何をやっているか分かりづらい面がありました。ここに来れば一目で分かり、市民がどんどん参加できるような形に持っていきたいですね。

湯浅　大阪大学のあらゆる知が一覧できる、情報の集約拠点ですね。通常、懐徳堂は漢学の学校で文系のルーツ、適塾は蘭学の学校で理系のルーツととらえられています。懐徳堂の学問は確かに儒教がベースになっていますが、自由闊達な精神にあふれており、朱子学に凝り固まっていたわけではないのです。例えば、中井履軒は人体解剖図を書いたり天体模型を作ったりして、非常に実証的な学問を行っています。その弟子の山片蟠桃は、早くも地動説を唱えています。

武田　あの解剖図を見て驚いたのですが、『解体新書』が出るより早かったのですね。21世紀懐徳堂も、大阪大学の文理融合型の学問体系を社会に還元できるような組織を目指しています。

湯浅　懐徳堂記念会と大阪大学による講座を始めて60年になり、年間80ほどの公開講座を開催しているのですが、人文系に特化した内容です。これからは社会科学系、自然科学系を含む市民ルネサンスという特色が大事になってくると思います。

武田　活動拠点として21世紀懐徳堂内にギャラリーと多目的スタジオを開設しました。各種の市民講座やワークショップを開催し、演劇やさまざまなパフォーマンスに市民と学生が一緒になって参加します。

「オール阪大からオール大阪へ」をキャッチフレーズに、大阪を元気にするための文化支援を行っていきます。地域の人々、自治体、企業、NPOなどとコラボレーションし、21世紀懐徳堂が媒介となって市民と大阪大学の知財をつなぎ、豊かな文化を花咲かせる仕掛け＝大阪ルネサンスを仕掛けていきたいと思っています。

木製天図

中井竹山肖像画

入徳門聯

越俎弄筆

技術シーズの実用化・事業化加速を支援する

「共同研究はスピードが命だ」

● 工学研究科附属フロンティア研究センター　教授
北岡康夫── *Yasuo Kitaoka*
E-mail : kitaoka@frc.eng.osaka-u.ac.jp
● 工学研究科電気電子情報工学専攻　教授
森　勇介── *Yusuke Mori*
E-mail : mori.yusuke@eei.eng.osaka-u.ac.jp

合同会社フロンティア・アライアンスは、大学における研究開発の飛躍的発展を目標に、研究環境整備と産学連携を推進する大阪大学大学院工学研究科の教員が出資し、2006年5月に設立された。出資者数が30人となった現在、大学・企業のOB人材活用、研究成果の活用事業にも着手している。従来の産学連携との違いや主な業務内容などを、北岡康夫教授と森勇介教授に聞いた。

北岡康夫教授

森勇介教授

Frontier Alliance,LLC

■事業化を目的に共同研究を支援

――合同会社フロンティア・アライアンスの設立以前から、大阪大学は産学連携に積極的に取り組んできました。まずその経緯から。

北岡　工学研究科では01(平成13)年に、文部科学省の科学技術振興調整費戦略的研究拠点育成事業(スーパーCOE)「フロンティア研究拠点構想」により、フロンティア研究機構を設置しました。02(平成14)年にNPO法人フロンティア・アソシエイツを設立し、産学連携を支援する体制を整備してきました。

06(平成18)年からはフロンティア研究拠点構想の成果を引き継ぎ、恒常的な制度運営のためにフロンティア研究機構を改組し、フロンティア研究センターを設置。また、NPO法人では限界があった資金調達や共同研究、技術移転にかかわる業務を柔軟に推進するため、合同会社フロンティア・アライアンスを設立しました。

主な事業内容は、「産官学共同研究の企画・管理・推進」(企業ニーズと大学シーズとのマッチング・コーディネート)、「研究プロジェクトの実施」、「技術移転の推進」、「研究・技術コンサルティング」、「研究支援」です。

森　あくまでも事業化を目的として、共同研究をサポートする仕組みです。今の大学では、事業化を進めるにあたって、問題点が三つあります。

一つ目は人材の問題点です。大学には研究者は大勢いるのですが、研究したシーズを実用化し、産業まで自分で持っていくような人材はほとんどいない。あれこれアドバイスするようなコーディネーター的な立場ではなく、論文にはなりにくいが実用化に必要な問題点に対して実際に手を動かして解決していくような実践型の人材が不足しています。

二つ目は研究現場での問題点ですが、潜在的に有望な技術シーズがあっても、実際に産業界が手を出すところまでの技術に仕上げるモチベーションやノウハウが少ないこと。企業の基礎研究部門が飛びついたあと、次に事業部門が飛びつくレベルまで、企業を引っ張っていきながら技術を開発・高度化していく方策が大学にはない。では企業の研究所がそれをやれるかというと、企業でも研究部門と事業部門の間のハードルは高く、新提案を上司に認めてもらうのはなかなか難しい。上司は身内の意見よりも外部の権威やニュースに弱いので、大学が良い成果を出すということが重要になってきます。

三つ目は、研究開発成果を早く世に出す仕組みです。しかし、大企業が販売を開始するには、大きなリスクを伴うので決断がしにくい。一方、大企業は他社が先行していても追いかけ追い越すことは得意である。これらの問題点を日本的にうまく解決する方法がないかというところから出発しています。それをどう進めるのかを考えた結果、できたのが合同会社フロンティア・アライアンスです。

合同会社フロンティア・アライアンスの事業

■企業ニーズに基づく大学内共同研究方式

――今までの産学連携や共同研究との違いは？

北岡　従来は大学側が主導する形で、どちらかというと基礎研究寄りの共同研究が多かったのですが、フロンティア・アライアンスは企業側のニーズに基づき、事業化を目的とした共同研究を促進するために一連のサポート活動を行っています。より応用度の高い共同研究が可能になり、企業での研究開発や事業化に直結できます。大学研究者は基礎研究に、企業は事業化に、それぞれ集中できるスキームを構築しています。

森　フロンティア・アライアンスにおいて研究員を雇用し、大学の技術シーズを実用化する上で本当に必要とされる技術を開発することで、大学の研究と企業の開発の溝を埋めることが可能になります。その例として、「ワイドバンドギャップ半導体プロジェクト」では、研磨の神様といわれるような腕を持つ、大手電機メーカーを退職した技術者を雇用しています。その人が磨いた結晶サンプルは明らかに仕上がりが違っており、研磨メーカーに依頼するよりも優れています。また、大学で得られた成果を基に、条件の最適化や再現性の確認などを行い実用化へ近づけるなど、大学と企業との中間的な活動ができます。

北岡　ＴＬＯの業務は、大学技術の特許化や企業とのマッチングに限定されることが多い。一方、フロンティア・アライアンスは、共同研究支援から市場開拓、事業化支援、および事業化に至るインキュベーション・プロセスをカバーしています。共同研究の技術シーズが「ダーウィンの海」を渡り早期に実用化されるためには、企業に対して柔軟に、かつ多様なサービスを提供できるような機動力をもつ組織が必要です。

森　スピードが命です。私は日米の企業と同じテーマで共同研究をした経験がありますが、アメリカの企業は10倍金を出すから2倍スピードを上げてくれと言います。日本は半分の金で何とか……。それでは負けてしまいます。

■特許管理よりも実用化で産業創出

――日本の技術移転はＴＬＯによる特許化が主流であり、出願数が増加する一方で、審査請求も商用化もされずに埋もれていく特許が多いのが問題です。

北岡　大学技術移転の世界では、ごくわずかの特許が収益の大部分を生み出すとされています。産学連携において大学が多くの特許を管理維持することは困難であり、大学は基本特許やコア特許を中心に保有し、周辺特許は企業が保有することが望ましいと、私は考えています。その基本特許やコア特許を企業が活用化し事業化すれば、研究成果の価値を高めることができます。もちろん、事業化に成功すれば特許を保有する大学にライセンス収入が入り、大学にとっても大きなメリットになります。特許を管理するだけではなくて、まず産業化することが大事です。そうすれば、大学が持っている知財の付加価値も上がります。

森　極端なことを言えば、特許が十分でなくても良い技術を実用化する方に注力した方が良い場合もあります。産業が創出され、社会が活性化することが重要なのです。

北岡　現在、フロンティア・アライアンスの中では、マテリアル生産科学系研究者で構成される「ものづくりリエゾンオフィス」が事業部として設立され、この分野の事業化にかかわる課題解決の窓口になっています。また、フロンティア研究センターで開発したイノベーション人材育成プログラムをフロンティア・アライアンスのプログラムに取り入れ、企業や他大学に提供することにも取り組んでおり、教育面でも社会に還元をしていきたいですね。

森　教育に関する事業はすぐには収益が出ませんが、社会貢献としての意味が大きい。また、実用化プロセスを間近で見ることで、学生も自分の研究が世間に役に立つことを実感できる。大学と研究と企業での研究とがつながってくると自分の将来にも夢が持てるようになると思います。

合同会社（LLC）とは

2006（平成18）年5月1日の商法改正に伴う新会社法により導入された新しい組織制度。日本版LLC(Limited Liability Company)と呼ばれる。株式会社とは異なる内部自治原則に基づき、知識・ノウハウ・技術など、事業への貢献度に応じて、利益や権限の配分を自由に決定できるのが特徴。柔軟かつスピーディーな運営が可能になり、産学連携や共同開発ベンチャーなどでの活用が注目されている。

よく学び、よく教える『うれしさが伝播していくような教育現場に』

◉OB訪問

●学校法人金蘭千里学園　理事長――辻本　賢――Ken Tsujimoto

学校法人金蘭千里学園理事長の辻本賢さんは、高等学校・中学校の学校長を兼務し、今も教壇に立って社会科を教えている。くしくも統合された大阪大学と旧大阪外国語大学両校の出身者である。本学大学院国際公共政策研究科（OSSIP）でも学び、現在は同研究科アドバイザリーボード委員を務めている。よく教える人は、またよく学ぶ人だった。

●辻本　賢（つじもと　けん）氏
1940年大阪府生まれ。63年大阪大学法学部卒業、65年同大学院法学研究科公法学修士課程修了。94年大阪外国語大学Ⅱ部英語学科卒業。2002年大阪大学大学院国際公共政策研究科後期課程単位取得後退学。金蘭千里高等学校中学校教諭、教頭、校長を経て、学校法人金蘭千里学園理事長、兼任校長。

1960年に法学部2年生だった辻本さんは、いわゆる60年安保の世代。社会も学内も騒然としているとき、将来を決定づける師に出会った。国際法の大洲仁右衛門教授。授業放棄が続くなか、学内集会の場で敢然と日米安全保障条約について語る姿に学者の良心と信念を感じ、「この先生は本物や」と思った。大洲ゼミに入り、「もうちょっとこの先生についていこう」と、大学院に進学。

「それこそ『歎異抄』にある『たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう』という心境でした」

金蘭千里の建学の精神に「師と仰ぐ人のもとで幾人かの塾生が、師に私淑して直接に感化に浴し、人間として育成していく」という「私塾」の精神がある。辻本さんの学生時代の大洲ゼミは、まさしく少人数の厳しいが人間味のあふれる私塾のような雰囲気だった。学生3人に助手1人、大学院生2人。院生の1人が、大学院国際公共政策研究科の初代研究科長の川島慶雄氏だった。

教養課程のフランス語の授業でサンテグジュペリの『星の王子さま』を読んで以来、モンテスキューの『法の精神』やルソーの『社会契約論』なども原書で読んだ。といっても、勉強ばかりしていたわけではない。イタリア映画『芽ばえ』を観て、ジャクリーヌ・ササールに魅了され、映画研究部に所属。大阪学生映画友の会を代表し、映画館と交渉して早朝割引を実現させたり、自主上映も行った。

修士課程修了時に金蘭千里高等学校・中学校が創立され、大阪府立大手前高校の恩師である佐藤一男初代校長から声をかけられた。一から伝統を築いて理想の学校をつくりたいという話に共鳴し、社会科教諭として赴任した。

「自主独立（英国のパブリック・スクールの精神）」も、同校の建学の精神の一つ。学士入学した大阪外国語大学の卒業論文は「1944年教育法にみる英国公教育制度とパブリック・スクールの地位」。その後、金蘭千里高等学校は海外研修をイートン、ハロウ、ラグビーの3校で実施するようになった。

今、親や学校の教育力とともに地域社会の教育力が低下しているといわれている。大阪私立中学校高等学校連合会副会長でもある辻本さんは、「地域に愛される私学の在り方」を模索している。理事長職にありながら授業も担当。さらに、毎朝8時から半時間、校庭に立って登校してくる生徒を迎えている。

「成長してきているなと分かる生徒がいます。あいさつする声にハリが出てきて、顔が変わってくる。学校は君のことを気にかけているということを感じてもらいたいから、できるだけ目を見るようにしています。お互いに会釈してもらうとうれしい。このうれしさが伝播していくようでなかったらいけない。そこがしっかりしてくれば、勉強もできるようになります。たとえ勉強できなくても、その子の人生は豊かになると思います」

よく学ぶ人は、やはりよく教える人だった。

●松浦由加子(まつうら　ゆかこ)
1987年石川県生まれ。富山県立富山中部高等学校卒業。人間科学部3年生。大阪大学体育会アーチェリー部に所属。第49回全日本ターゲットアーチェリー選手権大会準優勝(2007年10月)、第60回国民体育大会アーチェリー競技個人準優勝(2005年10月)、第23回全国高等学校アーチェリー選抜大会6位(2005年3月)。

自分と向き合い、集中力を磨く

アーチェリーの全日本選手権で準優勝

● 人間科学部　3年生
松浦　由加子――*Yukako Matsuura*

大阪大学体育会アーチェリー部の松浦由加子さんが、昨年10月に開催された第49回全日本ターゲットアーチェリー選手権大会で準優勝を果たした。北京オリンピック代表選手を破って進んだ決勝トーナメント。108-105の僅差で優勝には届かなかったが、堂々の2位。体の故障にもめげることなく、松浦さんは世界大会出場を目指して練習に励んでいる。

「緊張して自分の力を出せないで終わるのが一番悔しいことなので、今までやってきたことを全部出せるような試合をしたいと思っています。それで負けたら実力が足りなかったんだし、勝ったらうれしい。自分の力を最大限出すには試合中にあれこれ考えてもだめなので、1カ所だけ注意するところを決めて臨み、あとは気持ちで負けないようにしたい」

ターゲットアーチェリーの女子個人戦(シングルラウンド)は、70・60・50・30メートル(男子は90・70・50・30メートル)の4距離それぞれ36射ずつ、合わせて144射の合計点を競う。集中力が求められ、朝から夕方まで続く競技は緊張の連続。またトーナメントでは、一対一の対戦が続く。社会人・学生が共に戦う全日本選手権大会では、予選シングルラウンドを通過した上位16人が決勝トーナメントに進み、70メートル12射の試合を繰り広げる。

昨年10月の全日本選手権には、北京五輪代表の林勇気(堀場製作所)、北畠紗代子(ミキハウス)、早川浪(日体大)の3選手も参加。決勝まで勝ち進んだ松浦さんは桜沢明代選手(清瀬病院)に惜敗したが、十分に実力を見せつけた。

「アーチェリーは自分と向き合うスポーツ。全日本クラスで決勝トーナメントに出てくる選手はそんなに大差ないだろうと思って、相手のことを意識せずに自分の力を出すことだけに集中しました」

松浦さんがアーチェリーを始めたのは、高校に入学してから。中学時代は水泳部に所属。「どちらも自分の記録を狙って練習する個人競技」という松浦さんは、めきめき腕を上げ、高校2年で出場した選抜大会で6位入賞、高校3年の国民体育大会では個人2位の成績を収めた。

阪大に入学してからは、広い練習場を利用して実力を磨いてきた。平日は空き時間に自由練習。土曜日は朝から夕方まで全体練習。練習の前後や家ではストレッチや筋トレも行っているが、実際に各距離を射る練習を重ねている。

「やみくもに射るのではなく、今日はここに気をつけようという目的意識を持って練習するようにしています」

休日は試合に出ることが多く、アーチェリー中心に生活が回っている。しかし、アーチェリーを離れると普通の女子学生。「先日初めてネギ焼きを食べたら、おいしくて感動しました」。人間科学部では臨床心理学を専攻。最終的にはスポーツ心理学を研究したいという。

これまで順風満帆で来たが、全日本で準優勝した直後に肩を傷めた。そのけがが治ったと思ったら、今度は腰痛に見舞われた。つらい一時期が過ぎて、弓を引けるところまで回復してきた。

「全日本で準優勝したときはうれしかったけれど、さらに上がある。復帰したら優勝を目指してやっていきたい。そして、もう一つの大きな目標は世界大会出場です」。趣味を聞いても「アーチェリー」と答える松浦さんなら、この目標も射止めることができそうだ。

HEALTH

■健康

「発達障害を持つ子どもの現状とこれからの課題」

医学系研究科 教授
永井利三郎――Toshisaburo Nagai
E-mail：nagai-t@sahs.med.osaka-u.ac.jp

発達障害は、一般的に広汎性発達障害（PDD）、注意欠陥多動性障害（AD／HD）、学習障害（LD）とその関連病態を指して使われている。2005年に制定された発達障害支援法において、その支援の枠組み作りが提示されたが、この法律の社会的意義は極めて大きい。これらの障害を中心とした病態が支援の対象として明記されたのは、これらの子どもたちが、明らかな運動機能障害や知的障害が乏しいか、むしろ知的に高いこともあり、従来の障害者支援の枠組みの対象にならなかったため、有効な支援がなされてこなかったことが大きな理由である。これらの子どもたちは障害が理解されにくく、またこれまでの幼児期の健康診断の枠組みにおいては発見されないことが多かった。そのため就学後にさまざまな問題を顕在化させ、いじめの対象や不登校になったりし、その対応が学校現場の大きな課題となっている。

文部科学省は、学校の通常学級の中におり、かつこれらの障害を持っている子どもたちの実態について、2003年に全国調査の結果を報告した。これは各発達障害について、国際的に用いられているスケールを用い、小中学校の教員によって調査が行われたものであり、回収率も極めて高く、信頼性の高い調査である。その結果全体で6.3％の子どもたちが何らかの行動上の課題を持っていることがわかり、その後の支援の枠組み作りの重要な根拠となっている。

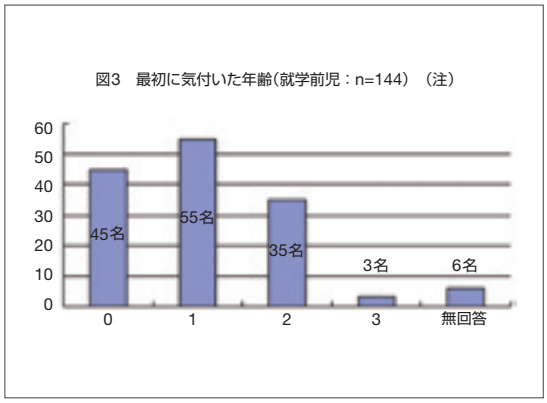
従来の特殊教育に変わり、発達障害の子ども も含めた特別支援教育が2007年度から本格実施となった。特別支援教育における最も重要な点は、障害を持つ子どもに対して、その障害特性に関する評価に基づき、教育の経過に応じてどのような取り組みを行っていくかについて、個別の教育支援計画を立てて実践すること。また特別支援教育コーディネーターを配置し、保護者や関係機関との調整を行うことなどである。各学校の取り組みは進みつつあるが、発達障害の保護者会の調査では、特別支援教育の中身がなかなか見えないという不満が大きい。特別支援教育の進展と、これに対する一般の支援と理解は、わが国の将来を担う子どもたちの教育体制として、緊急の課題である。

図1　人の心を推し量るのが苦手で、思ったことをそのまま言ってしまう

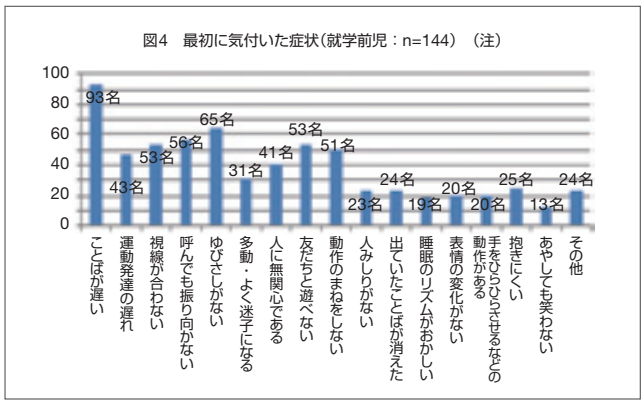
図2　感覚過敏（環境音が苦手）

＊関西特別支援教育ネットワークイラスト集より、いわみせいじ作

障害の中で、とくに広範性発達障害の子どもたちは、対人関係の形成に必要なコミュニケーションや、人の思いを推し量る力に課題があり（図1）、また感覚過敏（図2）などを併せ持つために、なかなか集団生活になじみにくく、これらの問題は就学前から顕在化してくるが、診断の遅れからその対応が遅れていた。保護者会の調査や、我々の実態調査においても、多くの保護者はすでに乳児期において、「指さしがない」「呼んでも振り向かない」などの、兄弟や他の子どもたちと比較して、様子がおかしいことに気が付いていた（図3、4）。多くの保護者は子どもに知的な遅れが乏しいことから、しつけや対応が悪いとみなされ、肩身の狭い思いをしてきた。



発達障害の子どもたちへの支援は、まず生活しやすい環境を提供してその内在する高い能力を発揮できるよう、配慮することである。これらの対応は幼児期早期に開始するほど有効である。各種の対応スキルが開発されてきているが、まだ国内ではあまり普及していない。医師の間における診療も児童精神科医以外はあまり取り組まれていなかったが、一般の精神科医、小児科医、小児神経科医の中に裾野が広がってきており、その支援の基盤作りは進んできている。



保健学科の看護学専攻では看護師・保健師・養護教諭など、医療・保健の分野に人材を送り出している。そこで平成18年度から、文部科学省の現代GP公募課題の中で「親と子の心に支援できる人材育成の構築」と題して、これらの子どもの発達特性を理解し支援できる学部教育の実践を行っている。この取り組みに対しては学生の印象も好評であり、卒業後の活躍が期待されている。

しかし最も大事なことは、専門家だけでなく、国民が広くこの障害を理解し、共生を図っていくことであり、一般への啓発が大きな課題である。特に学校を卒業したのちの社会の受け入れに関しては、どのような援助が有効かについても検討がまだほとんどなされていない。彼らの内在する優れた能力を生かしていけるかは、私たちに課せられた大きな課題である。

（注）堺市の発達障害児支援の実情に関するアンケート調査報告書より

PSYCHOLOGY

■心理

「マスコミのスケープゴーティング」

人間科学研究科 人間行動学講座
対人社会心理学研究分野 教授
釘原 直樹
E-mail : kugihara@hus.med.osaka-u.ac.jp

■スケープゴートとは

朝青龍、亀田親子、エリカ様、ホリエモン、モンスターペアレント、産科たらい回し、O157とカイワレ大根などを並べますと、どれについてもあまり良いイメージはありません。このような人や対象は一時期マスコミでさかんに取り上げられ非難の的になりました。でもある意味では憂さ晴らしの対象(スケープゴート)になっているのではないかとも思われます。

スケープゴートという言葉は古代贖罪の日のユダヤ人の儀式に由来すると言われています。この日2頭の山羊が引き出され、1頭は神の生贄となり、もう1頭はスケープゴートとして人々の罪を背負わされ荒野に追いやられたということです。

スケープゴートは個人や集団の攻撃エネルギーが集中的に他の個人や集団に向けられる現象です。攻撃対象が正当なものとして確かめられているわけではなく、その行為の是非が十分吟味されているとは限りません。次の写真はロバート・キャパが1944年8月、解放後のパリ市内で撮影したものです。ドイツ兵との間にできた赤ん坊を抱いた女性が坊主頭にされ、大勢の群集に取り巻かれ、引き回されています。坊主頭とそれを見ている人々の笑い顔が強烈な印象を与えます。

写真　解放後のパリ市内を引き回される、ドイツ兵との子をもうけた女性たち(1944年8月)
ROBERT CAPA © 2001 By Cornell Capa

■マスコミとスケープゴートの変遷

マスコミの非難対象が次々と変遷することは内外の研究で明らかにされています。例えば1942年にボストンで発生したナイトクラブ火災事故では、新聞の攻撃対象が火をつけた少年からクラブの所有者(ユダヤ人)、消防署、警察、市議会、市長へと変遷しました。また2005年に発生したJR福知山線事故では対象が運転手、車掌、慰安旅行やボウリング大会に参加した社員、事故当日夜の酒宴に参加した代議士、道路で暴走行為をした社員、社員を殴った乗客、JRに寿司の代金を要求したマンション住民、JRを糾弾した新聞記者、過密ダイヤを作ったJR当局、それに社会の風潮といったように変化しました。

■波紋の拡がり

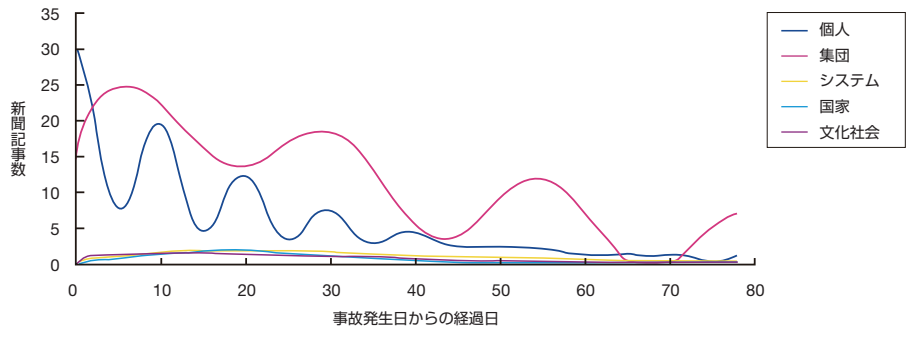
このような変遷を、波紋の拡散としてモデル化できると考えました。このモデルでは質と量の両面を考慮します。量に関して、事件直後にはその衝撃によって大きな波紋が発生します。振幅の大きさは攻撃エネルギーの量であり新聞記事の数に反映されます。時間が経過するに従って振幅は次第に低下します。ただし、1週間、1カ月といった記念日的な日や新たな手がかりが発見された場合、記事数が若干増減します。そして他の大きな事件が発生するとそのエネルギーによって消滅することになります。

質に関しては攻撃対象の変遷について言及します。波紋の中心に近い所ではそのエネルギーが狭い範囲(個人＝攻撃対象人物)に集中します。しかし時間経過に従って中心から離れ、職場の同僚、システム、管理者、行政当局、社会、国家というように拡散して行きます。それとともに1件当たりの攻撃エネルギーは低下します。あるレベルまで低下すれば新聞記事として掲載されることはなくなります。

図はJR福知山線事故に関する朝日、読売、毎日の非難記事数の変遷をワイブル関数と周期関数の合成関数に当てはめて描いたものです。非難記事数のピークは個人が初日、集団は6日目、システム18日目、国家18日目、文化社会12日目となりました。個人は集団より減衰率が高いことが示されています。

このような変遷パターンが一般的なものかどうかはわかりません。今後、いくつかの事件についても分析して、共通面と異質面を明らかにしようと思っています。

図　JR事故に関するマスコミの攻撃対象の変遷



安全のための量子センシング

地雷探知、手荷物検査、非破壊検査……新技術が真価発揮

● 基礎工学研究科　教授
糸﨑秀夫――*Hideo Itozaki*　*E-mail : itozaki@ee.es.osaka-u.ac.jp*

安全で安心な社会を支える最先端技術がここにある。対人地雷の探知機、麻薬や爆発物を検知する手荷物検査装置、事故につながる金属クラックや腐食を見逃さない非破壊検査装置――いずれも従来とは異なる技術で画期的な精度の高さを実現した。それを可能にしたのは、核四極共鳴（NQR＝Nuclear Quadrupole Resonance）現象の追究と、超伝導現象を利用した超高感度磁気センサー（SQUID＝Superconducting QUantum Interference Device）の革新的な研究だ。

■電波で分子の指紋を見る

糸﨑研究室はシステム創成専攻・電子光科学領域。多様な研究テーマに共通しているのは、目に見えないモノを見るためのセンシング技術と社会的ニーズの高さ。地雷や爆弾などの探知技術は紛争地域の復興支援に役立ち、テロ対策に必須だ。

今までの地雷探知は金属探知機によるもので、砲弾のかけらや鉄釘にも反応してしまい、地雷との違いを判別することが困難だった。金属探知機が反応した場所に地雷がある確率は、約1000分の1といわれている。ところが、糸﨑教授の開発した探知技術を用いると、確実に地雷だけを見つけることができる。その技術の基礎にある核四極共鳴（NQR）現象とは？

「それは電波で分子の指紋を見るような『量子センシング』の技術です。原子は分子構造の影響を受けて、原子核が特定の周波数の電波にのみ反応する核四極共鳴という現象を示します。そこで、分子に特定の電波を当てて反応するかどうかを調べることによって、どんな分子であるかを特定できるのです」

確実に地雷だけを見つけることができる、NQR地雷探知機

■不正薬物を検知し見分ける

核四極共鳴にはラジオなどで利用されている電波を利用するが、この電波は透過性が高く、かばんや衣類も簡単に通り抜けることができるため、空港などの荷物検査にも応用できる。

「X線検査、金属検査、ペットボトルの液体検査などが行われていますが、十分とは言えません。不正薬物の発見は犬に頼っているのが現状です。分子の指紋を見るNQR技術を利用すると、かばんに入ったまま火薬、麻薬を瞬時に見分けることができます」

手荷物検査装置の試作機は、トンネル構造の磁気シールド内に荷物を通し、NQR信号を受信する。信号はパソコンで処理され、不正薬物を検知すると警告ランプが点灯。機内への持ち込みを未然に防ぐ。

手荷物検査装置の試作機。NQR技術を利用することによって、瞬時に不正薬物を検知することが可能

■世界最高感度のセンサー

もう一つの主要な研究領域は、超高感度磁気センサー（SQUID）の開発。従来の磁気センサーの100倍の感度を持ち、地磁気の5千万分の1以下の微弱磁場を検出できる世界で最も感度の高いセンサーである。

「超伝導現象を利用して微弱な磁場変化を検出するこの技術は、金属の非破壊検査や、食品パッケージ内の金属異物混入検査にも応用できます。また、人体の生体信号電流に伴う磁場を体外から観察できるので、脳や心臓の検査への応用も期待できます」

■高い学生のモチベーション

爆発物などの危険物質を取り扱うことから、実験には困難も伴う。「専門の施設に出向き、数日間の集中的実験も行っています。安全に、かつきちんと実証できるような模擬物質を選定して使うことも必要です」

デバイス開発から試作製品のフィールドテストまで、実用化を目指す幅広い階層の実験や学会発表、展示会出展などを通じ、自分の得意分野で力を発揮する学生のモチベーションは高い。

▼デバイスを作製するクリーンルーム

関西の持続可能な産業社会形成を考える RISSが洞爺湖サミットなど記念しシンポジウム開催

大阪大学サステイナビリティ・サイエンス研究機構(RISS)は3月7、8の両日、RISSシンポジウム「持続可能な産業社会形成」を大阪大学中之島センターと尼崎市中小企業センターで開催しました。このシンポジウムは、北海道洞爺湖サミット・G8環境大臣会合開催を記念したもので、21世紀の関西の産業社会の持続性を考え、「企業」と「地域」の役割やその相互関係を重要視した新たな日本の産業地域社会構築への提言を図ろうと開かれたものです。自治体、企業、大学、経済界、メディア関係者ら約400人が参加しました。

1日目のテーマは、「産業社会を持続させるためのフィロソフィ」。中谷秀敏・大阪ガス副社長が持続可能な社会に活かせる日本の技術と智恵について講演した後、国際日本文化研究センターの山折哲雄名誉教授が、日本的な考え方を背景にした企業経営から修得する社会形成の意義を、最後に本学の鷲田清一総長が、豊かさの意味を再考することによる行動の重要性と、それがもたらす意味について話しました。

一方、「環境再生による持続可能な地域づくり」をテーマに開いた2日目の第2回RISS国際シンポジウムでは、早稲田大学の伊藤滋特命教授が基調講演。欧州の都市再生事業の成功例として、ドイツのIBAエムシャーパーク事業をゲルハルト・ゼルトマン・関税同盟炭鉱エキジビション公社社長が、「世界有数の復興都市」に国連から認められたスペイン・ビルバオ市のケースはイボン・アレッソ副市長が、それぞれの取り組みを紹介しました。

国際日本文化研究センター・山折哲雄名誉教授

大阪大学・鷲田清一総長

スペイン・ビルバオ市 イボン・アレッソ副市長

また、講演後のパネルディスカッションでは、講演者3人に伊久哲雄・積水ハウス常務、本井敏男・兵庫県まちづくり局長、武内和彦・東京大学大学院教授が加わり、活発な議論を展開しました。

関西を中心とした国内の産業地域社会の現状と課題に深く切り込むとともに、世界最先端の地域再生事業を紹介するなど学術的、社会的にも注目を浴び、日経、読売、毎日、神戸の各紙、NHKなど主要メディアで報道されました。

受　賞

平成20年春の紫綬褒章受章　大貫惇睦教授(理学研究科)

摂待力生准教授、大貫惇睦教授(理学研究科)「**日本物理学会論文賞**」受賞
工学研究科機械工学専攻「**日本機械学会教育賞**」受賞
永妻忠夫教授(基礎工学研究科)「**第53回前島賞**」受賞
奥山雅則教授(基礎工学研究科)「**JJAP編集貢献賞**」受賞
中西周次助教(基礎工学研究科)「**電気化学会進歩賞・佐野賞**」受賞
赤井伸郎准教授(国際公共政策研究科)「**第48回エコノミスト賞**」受賞
中谷和彦教授(産業科学研究所)「**第25回日本化学会学術賞**」受賞
山口明人教授(産業科学研究所)「**日本細菌学会浅川賞**」「**日本薬学会賞**」受賞
中長啓治准教授(接合科学研究所)「**平成19年度溶接学会論文賞**」受賞
「**平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰**」受賞
・**科学技術賞**(研究部門)　**森勇介教授、高野和文准教授、安達宏昭特任准教授、井上豪教授、松村浩由助教**(工学研究科)
・**科学技術賞**(理解増進部門)　**菊池誠教授**(サイバーメディアセンター)
・**若手科学者賞**　**松永幸大講師、村橋哲郎准教授、櫛引俊宏特任講師**(工学研究科)
西野邦彦助教(産業科学研究所)

Schedule――◇シンポジウム等

●**Osaka University GCOE Summer Seminar Program for Electronic Devices －Academic Melting-Pot2008(AMP2008)－**
7月7日(月)～8月1日(金)、吹田キャンパス他。
問い合わせ先＝AMP2008/GCOE CEDI事務局(TEL06-6876-4712)
E-mail：office@gcoe.eei.eng.osaka-u.ac.jp
http://www.eei.eng.osaka-u.ac.jp/gcoe/english/amp/amp2008.html

●**第6回 handai metaphysica 特別講演会**
7月11日(金)、待兼山会館2F会議室。
問い合わせ先＝文学研究科哲学哲学史／現代思想文化学専門分野
E-mail：funacho@let.osaka-u.ac.jp

●**三大学工学系人材交流シンポジウム**
7月28日(月)、医学部銀杏会館。問い合わせ先＝工学研究科・澁谷陽二教授
(TEL06-6879-7310)E-mail：sibutani@mech.eng.osaka-u.ac.jp

●**第5回大阪大学社会経済研究所附属行動経済学研究センターシンポジウム**
8月27日(水)、大阪大学中之島センター。
問い合わせ先＝社会経済研究所庶務係
(TEL06-6879-8552、FAX06-6879-8584)
E-mail：shomu@iser.osaka-u.ac.jp

●**1st ASIAN Computational Materials Design (CMD®) Workshop-CMD® ASIA2008**
9月1日(月)～3日(水)、De La Salle University-Manila(Philippines)。
問い合わせ先＝ＣＭＤ®ASIA2008事務局
E-mail：cmd-asia@dyn.ap.eng.osaka-u.ac.jp

●**第13回コンピュテーショナル・マテリアルズ・デザイン(CMD®)ワークショップ**
9月6日(土)～10日(水)、国際高等研究所、日本原子力開発機構関西光科学研究所。問い合わせ先＝ＣＭＤワークショップ実行委員会
E-mail：cmd@dyn.ap.eng.osaka-u.ac.jp

●**第44回日本移植学会総会(第4回世界移植DAY同時開催)OKTF2008**
9月19日(金)～21日(日)、大阪国際会議場。
問い合わせ先＝第44回日本移植学会総会事務局(TEL06-6879-3746、FAX06-6879-3749)E-mail：tanimoto@att.med.osaka-u.ac.jp

●**大阪言語研究会第160回例会**
9月20日(土)、待兼山会館。
問い合わせ先＝文学研究科・神山孝夫教授
(FAX072-730-5338)E-mail：kamiyama@let.osaka-u.ac.jp

●**Handai Nanoscience and Nanotechnology International Symposium 2008～from Nano-fabrication to Nano-application～**
9月29日(月)～10月1日(水)、医学部銀杏会館。
問い合わせ先＝ E-mail：nanosympo2008@sanken.osaka-u.ac.jp
http://www.netroom.sanken.osaka-u.ac.jp/nanosympo2008/

▶訂正　№39 4ページの写真説明で中央公会堂とあるのは大阪市役所でした。おわびして訂正します。

Handai NEWS Letter No.40 2008・6・Summer
[阪大ニューズレター]
●発行日・平成20年6月1日 ●発行・大阪大学 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 TEL 06-6877-5111
●編集・大阪大学総務部評価・広報課広報・社学連携事務室 ●編集協力・毎日新聞総合事業局
OSAKA UNIVERSITY 大阪大学

大阪大学21世紀懐徳堂 オープニングセレモニー開催

大阪大学の社学連携事業の拠点として4月に新設された大阪大学21世紀懐徳堂のオープニングセレモニーとレセプションが5月27日(火)、中之島センターで開催されました。

「大阪元気力・文化力」をテーマに開催されたトークセッション。(左から)高島CSCD招へい教授、河田大学院工学研究科教授、平田CSCD教授

金水CSCDセンター長によるプレゼンテーション

佐治敬三メモリアルホールで行われたセレモニーでは、武田佐知子・大阪大学21世紀懐徳堂学主(理事・副学長)の開会挨拶の後、「大阪元気力・文化力」と題したトークセッション(講師：河田聡大学院工学研究科教授、平田オリザCSCD教授、高島幸次CSCD招へい教授)の他、「大阪のメセナ活動～懐徳堂～」(講師：湯淺邦弘大学院文学研究科教授)と「21世紀懐徳堂と社学連携」(講師：金水敏CSCDセンター長)の二つのプレゼンテーションが行われました。

また、セレモニーの後は交流サロンに会場を移し、レセプションが行われました。ピアニスト、青柳いづみこさんによるピアノ演奏で始まり、鷲田清一総長の挨拶の後、堀井良殷・(財)大阪21世紀協会理事長から来賓祝辞が述べられ、金森順次郎元総長の発声による乾杯の後歓談に入りました。当日は、平松邦夫大阪市長の他、関西財界、近隣自治体、文化NPOの関係者、本学関係者ら約150名もの方が出席のもと、お互いに意見交換を行うなど活発な交流の場となりました。また、途中でも青柳さんのピアノ演奏でレセプションが一層盛り上がり、終始和やかな雰囲気で発足を祝いました。

武田佐知子副学長による挨拶

入会者増加でにぎやかに
第3回ホームカミングデイを開催

熊谷同窓会連合会会長の挨拶

今年もいちょう祭の開催に合わせて5月3日(土)、豊中キャンパス共通教育本館(イ号館)イ講堂と学生交流棟「宙」で、第3回大阪大学ホームカミングデイが開催されました。

今年は、同総会連合会の入会者が増加したこともあり、卒業生の方々、教職員OB、名誉教授の方々、これまでで最多の約230名の参加がありました。

当日はイ講堂で、武田佐知子理事・副学長の司会により、鷲田清一総長の主催者挨拶、熊谷信昭同窓会連合会会長(元総長)の挨拶の後、辻毅一郎理事から「海外拠点活動について」と題して、大阪大学の活動報告が行われました。

場所を「宙」に移してのレセプションは、森勇介・工学研究科教授の司会により、岸本忠三元総長による乾杯のご発声でスタートしました。会場では、家族連れの方々も多く見られ、総長と記念撮影をするなど終始なごやかな雰囲気の中、協賛いただいた企業等から提供のあった景品の抽選会も催され、来年の再会を互いに誓い合いながら散会となりました。

学生交流棟「宙」で開かれたレセプション

鷲田総長と記念撮影をする参加者たち

天神祭船渡御のご案内

日本三大祭の一つ「天神祭」の船渡御に「阪大船」が今年も参加します。

船渡御は、天神祭のクライマックスを彩り、大川を百隻あまりの船が行き交う、大阪の夏の風物詩として有名です。大阪大学の出船は今年で4度目となり、夏のイベントとして定着してきました。

今年も装いも新たに、その勇姿を大川の川面に浮かべることになりました。

水都に集う大勢の観衆に大阪大学をアピールする一大イベントに、多くの「阪大ファミリー」の皆様のご参加をお願いします。

【日時】 7月25日(金)午後6時～

詳しくは下記までお問い合わせ下さい。
大阪大学天神祭実行委員会(大阪大学総務部評価・広報課広報・社学連携事務室)
TEL：06-6879-7151
FAX：06-6879-7156
E-mail：
NOSE-N@star.jim.osaka-u.ac.jp

NEXT ISSUE・No.41
[阪大ニューズレター]次号(41号)の特集予告
◉社会と大阪大学をむすぶ『大阪大学サイエンスショップ』について特集します。

●大阪大学または阪大ニューズレターへのご意見、お問い合わせがありましたら、Eメールで受け付けております。E-Mail:NEWSLETTER@star.jim.osaka-u.ac.jp

◎阪大ニューズレターは、新聞古紙100%の再生紙を使用しています。